

〈社会学部社会福祉学科開設 記念講演〉

## 『福祉の心』

阿 部 志 郎\*

### 関西学院と私

私が関西学院に初めて参りましたのは今から50年程前のことですが、昔も今も変わらないこの美しいキャンパスをとっても羨ましく思っております。当時、神学部成全寮という寮がありましたが、本日、京都から来ておられる藤田牧師のお兄様を訪ねて、一晚そこに泊めていただき、宗教哲学の話の伺ったことを思い出します。

私は大学を卒業する年に、急に志望を変えて福祉の世界に入ることになりました。どうしていいかもわかりませんでしたので、竹内愛二先生を訪ねました。先生は、学生の私を大変親切に迎えてくださり、「アメリカに行って勉強しなさい」という助言と励ましの言葉をくださいました。その後も何度か先生を訪ねました。私が福祉の仕事を希望しているということをお聞きになったのか、当時おられた河辺満麿教授が「暁明館で働かないか」と誘ってくださいました。暁明館とは当時関西学院が持っていたセツルメントで、今は病院だと思います。私はその時の先生の好意を忘れたことはありません。

昭和20年代の終わりから、昨年まで関西学院大学でグループワークを教えておられた今井鎮雄先生の指導のもと、瀬戸内海の余島という島で日本で初めての障害者のキャンプが開催され、私も3年程参加いたしました。当時、学生ボランティアのひとりに武田 建先生がおられまして、その頃から脇にフットボールをかかえておられました。これまでも関西学院大学で社会福祉学会が2度開かれておりますが、その時にも武田先生は大変親切にお世話をしてくださいました。

今から49年前に私がアメリカに留学をした際、小寺武四郎、天羽徳之助、大道安次郎という3人の教授と同じ船で参りました。特に社会学の大道先生とは同じニューヨークにおりましたので、よく先生を誘って、夜になると肉、魚、ミルクのステーションを徹夜でまわったことがありました。大道先生は机の上に奥様の写真を掲げて、悠然とマッキーバー教授の研究にいそしんでおられました。

2回生以上の方はご存じだと思いますが、昨年、船本弘毅先生が東京女子大学の学長になりました。わずか1年にして全学の信頼を得ておられまして、関西学院大学が船本先生を送り出してくださいましたこと大変感謝しております。

### “はんぶんこ”の思いやり

さて、子ども達にこういう話をしたことがあります。「友達が家に遊びにきました。3時になってお母さんがおやつを心配をして戸棚を探すけれどもお菓子がありません。やっと缶の中に1枚のおせんべいを見つけました。でもこれでは困るだろう？ だって2人いるのにおせんべいは1枚しかないんだよ。君達はどうする？」

すると、子ども達はこう言いました。「簡単だよ。そのおせんべいを2つに割って分ければいいのさ。“はんぶんこ”にね」

「でも、“はんぶんこ”すると、どうしても大きい方と小さい方になってしまうよね。先生は子どもの時、いつも大きい方を先に自分が取って、小さい方を妹にやったので、妹からきらわれたんだ。だから君達はそんなことをしては駄目だよ。小さい方を自分が取って、大きい方を友達にあげ

\*横須賀基督教社会館 館長

れば友達は喜ぶよ。友達が喜んでくれたら、君達も嬉しいだろう？」さて、アジアにバングラデッシュという国があります。高い山のふもとに、日本と同じくらいたくさんの人達が住んでいます。収入は日本の160分の1しかない、貧しい国です。この国では雪溶けの水がたくさん川に流れますが、暖かい冬が来たり、嵐が見舞ったりすると川が氾濫して洪水が起こります。バングラデッシュでは毎年洪水が起こり、昨年は大きな洪水によって国の3分の1が水に浸かり、何10万人の人々の家が流されました。世界各国からボランティアの人々が援助に行き、日本からもボランティアの人々が救援物資をトラックに積んで現地に行きました。お菓子やタオル、石鹸などをひとつの袋に入れて配るのですが、子ども達がそれを取りに来ます。みんな1列に並んでひとつずつ袋を受け取りましたが、誰ひとりその場で袋を開ける子どもはいませんでした。私ならきつと、こっそりお菓子だけを抜き取ってポケットに隠すでしょう。でもバングラデッシュの子ども達は大事そうに袋を抱えて帰って行きます。なぜなら、それは家族と分かち合うためだからです。君達は、お菓子やおもちゃ、君達の力も、家族や友達と“はんぶんこ”しようね】。

話が終わった後に、ひとりのお母さんがやって来てこう言われました。「“はんぶんこ”という言葉初めて聞きました。私も子どもひとりっ子なので“はんぶんこ”した経験はないですし、兄弟喧嘩をしたこともありません。第一、今は子どもに与えるおやつが家にないということはありません」。私はその言葉を聞いて、“はんぶんこ”はもう死語なんだ、私は随分と時代に遅れたものだ、と痛感しました。昔は“はんぶんこ”しなければ、生き延びることができなかったのですから。

インドのモデリーという村へ行った時のことです。たまたまそこで結婚式があり、私も招かれました。その日、招かれたお客は4,000人で、村の人口すべてでした。その4,000人の人々が大地に座って一緒に食事をする様子は、壮観というより感動的でした。1組の若い夫婦の結婚を村をあげて祝福するという姿を見て、私はここにコミュニティがあると思いました。なぜなら、コミュニティ

の本質は『分かち合う』ということだからです。分かち合いのないところにコミュニティは存在しません。

日本も昔から、家、村という共同体が存在していました。アジア社会の特色は共同体があるということです。しかも、その共同体はイスラムであれ、ヒンドゥーであれ、ジャイナであれ、仏教であれ、キリスト教であれ、宗教に根ざしているという特色を持っています。日本も例外ではありませんでした。しかし太平洋戦争が終わると、伝統的な共同体は封建遺制であると否定され、法律も制度も改められました。そして、ヨーロッパのようなコミュニティを作ることを理想として50年歩んで来たのです。しかし今、果たしてコミュニティは出来たのか、という問いの前に我々は立たされています。日本に起こった激しい変化の中で、共同体が持っていた“はんぶんこ”の心は喪失してしまいました。

### “少子高齢社会”の影響

ひとつの大きな変化は“少子高齢化”です。昭和38年に老人福祉法が出来ました。この年に100歳を超えた人は153人でしたが、昨年敬老の日に100歳を超えた人は10,158人でした。倍増どころではなく、どんどん長寿になってきたのです。我々の寿命は、現在世界最高峰です。これだけの長寿をまっとうすることが出来るようになった理由は、国が豊かになり、医学が進歩したからです。感染症がなくなり、抗生物質が出来、延命も可能になり、赤ちゃんも死なずにすむようになりました。

昔は赤ちゃんが1,000人生まれると、そのうちの165人が死んでいました。今日アフリカにはなお、1年に300人の乳児が死亡するという国があります。バングラデッシュやネパールでは80人が死亡しています。それに対して、現在の日本では乳児1,000人に対する死亡率は4.3人で、この数字は世界最低です。赤ちゃんが死ななくてすむと、年齢が全体的に持ち上がっていきます。しかし、何といっても寿命を伸ばすことが出来た一番大きな理由は、太平洋戦争が終わってから今日まで、日本は戦争を行っていないことです。戦争を経験

していない、世界でもごくわずかな国のひとつなのです。太平洋戦争を起こす時、日本は国家予算の47%を戦争に投じました。そのために国民は食べ物も十分ではありませんでした。この時、相手国のアメリカはGNPが日本の12倍という大国でした。日本との戦争に使った国家予算はわずか5%なのです。これでは勝てるはずはありません。戦争が終って多くの軍事費が不必要になりました。現在防衛費は1%であり、社会保障に14%以上使えるようになりました。インドでは現在軍事費が14%、福祉に使えるお金は1%しかありません。ちょうど日本と逆の数字になっています。また、インドと核実験を争っているパキスタンでは軍事費に30%のお金が使われているため、福祉に使えるお金があるはずはないのです。これらの状況をみれば、私達日本人がどれほど恵まれているかがよくわかります。平和だけは、これからも守り続けなければなりません。

高齢化と共に、まったく予想できなかったことですが少子化が進んできました。私は兄弟が6人おり、男では4番目ですので名前も志郎(しろう)です。私の先生の名前は十郎といましたが、昔はそれほど兄弟が多かったのです。今ここには、兄弟が6人いるという方は多分おられないでしょう。最近の若い人の名前には「三郎」とか「五郎」というような数字のついた名前はなくなりましたね。女の子にも「〇〇子」といった名前は非常に少なくなりました。私が子どもの頃、年少人口は37%で、老年人口は4%ぐらいでした。それが一昨年の6月には年少人口と老年人口が逆転し、その後さらに数字は開き続けています。37%の子どもがいて4%の老人がいるということは、ピラミッド型の構造です。それが逆転して子どもが15%を割り、老人が16%を超え、ますます増えています。そうすると人口構造は逆ピラミッド型になり、どうみても不安定です。この不安定な構造をいかに安定化させるかということが今日の政策課題であり、介護保険はそこから生まれてきました。

少子高齢化と共にもうひとつ起こってきたのが“核家族化”という現象です。一家族の人数がだんだん減ってきて、現在はほぼ2.7人です。夫婦と子どもひとりにも満たないという数字ですか

ら、当然“はんぶんこ”する相手もいないわけです。“公園デビュー”という言葉が流行りましたが、わざわざ公園に友達をさがしに行かなければ、遊び相手がいないという時代になりました。

### “物質的豊かさ”が意味すること

もうひとつの理由は“貧しさから豊かさへ”ということです。太平洋戦争が終った後すぐに、ある政治家が掲げたスローガンは『いわし1匹に米3合』でした。当時、お米は毎日2合弱配給されていましたが、白米ではなく、しかも遅配に次ぐ遅配でした。ですから「せめて一日に3合食べたい、一日にいわし1匹のエネルギーが欲しい」という要求だったのです。今、皆さんは一日にいわし何匹分のカロリーを摂取しているでしょうか。

戦後、日本はどん底からスタートしました。昭和20年代は貧困の時代でした。昭和30年を過ぎてようやく経済成長期へと移行していきます。昭和33年に日本は初めてアメリカに車を輸出しました。30台の小型車をアメリカに持っていったのですが、この車はアメリカのハイウエーを走行できませんでした。ダッシュ力がなく、インターにヨタヨタ入っていくため危険で、高速に乗ってもすぐに故障したのです。しかしこれも無理はありません。昭和33年というと、日本に高速道路は1本もなかったのです。持っていった車はトヨベツトでしたが、アメリカ人からは“トイベツト”つまり、“おもちゃ”じゃないかと笑われました。その後、年と共に車に改良を加え、輸出台数を伸ばしていきました。ある年、アメリカに240万台輸出する年がありました。すると飛ぶように売れ、あまりに売れるのでアメリカの自動車産業を脅かし、貿易摩擦が起きました。以来日本は車に自粛制度を加えています。評判の悪い30台の車から、飛ぶように売れる240万台の車へと発展するのに要した時間は20年でした。この20年という時間の早さのことを、“経済成長”の上にわざわざ高度とつけて“高度経済成長”と表現しました。しかし、20年という時間は短すぎました。それ故に無理が起こり、矛盾が生じました。それが、現在の私達の社会に影を落としているのです。

『バスに乗り遅れるな』という言葉がありまし

た。バスは1台しかないのだから、飛び乗れということ。社会の激しい変化にみんな一生懸命ついてきました。隣の家がステレオを買ったから、うちもステレオを買うぞ、というように、常に周りを意識して、自分の消費欲を膨らませてきたのです。そうしてますます大量生産になり、大量消費を生み、それが循環してきました。バスに飛び乗る時、走れない人がいるということは全く念頭になかったのです。取り残される人々、つまり障害のある人達です。世界一義務教育が普及していると言われている日本の国で、障害児は学校に入れませんでした。障害児に就学権が与えられたのは昭和54年であり、戦後34年間という長い時間を必要としたことを忘れてはなりません。

“生産”“効率”“知能”、敢えて加えるとすれば“力”と“富”、それらが社会の価値観であり、人間をはかるスケールでもありました。そのスケールからはずれる人々を、社会は置いてきぼりにしたのです。そのひとつの大きなグループが老人です。戦後の日本の復興のために一生懸命働いて、年をとった人々です。年をとるということは労働能力の喪失を意味し、社会にとって用がないとみなされたのです。しかしあまりにも数が増え、問題が深刻化してきたのが昭和45年以降に起こってきた老人問題です。そして、福祉の問題も豊かさの進展と共に拡大してきました。私達は豊かになってたくさんものを得ましたが、失ったものも多かったのです。

私は神奈川県横須賀という町に住み、そこで働いています。この経済成長期に、大変困った教育問題にぶつかりました。中学生が学校に弁当を持って来る際に、箸を持って来ない生徒が出てきたのです。教師が「箸を持ってきなさい」と言うと、「俺は箸がなくても食べる」と開き直って、弁当箱にかぶりついて食べるのです。先生達はそれを“犬食い”と呼びました。横須賀には公立中学校が25校ありますが、この現象は全部の中学校に広がっていったのです。

人間はパンなくして生きることは出来ません。衣食住の基本的欲求が充足されなければ生活出来ないのです。しかし、それはいかなる形でも与えられればよいというものではありません。我々が求めるパンは、権利としてのパンです。権利とは、

もともと自分に属するもので、手にしようと思えば手に出来るものです。上から下に投げ与えられたものを、犬のようによつんばいになって食べたとは願いません。ひもじかった戦中戦後でさえ、誰ひとりそれを望みませんでした。今は、権利としてのパンが保障されるようになりました。

しかし、投げ与えられたものを我慢してまで食べない、という経験もしてきたのです。人間は動物とは違います。動物は下を向いて餌を求めてさまよい歩きます。餌を得ることが動物の目的なのです。人間はどんなにひもじくてもパンを得ることは目的にはなりえません。衣食住を手段として、より高い人生に向って歩もうとすることが人間存在だからです。“犬食い”は、手段であるべきパンが、いつのまにか目的化されたことを意味します。パンが目的化されるということは、生きる意味を失うということです。これが今日の私達の状況なのではないでしょうか。つまり、自分の人生を生きる意味や目的をしっかりと見定めていないのではないかとということです。

## 現代社会の課題

高度経済成長の時代から挫折が起きました。石油ショック、狂乱物価、バブル、地上げ、バブルの崩壊、経済不況、金融不安です。大きな企業が一晩で倒産し、消えてゆくという極めて不確実な時代になりました。1980年代からは“不確実性の時代”と言われはじめ、今もなお続いています。不透明、不安定、先が読めないという時代の中で、私達が身に付けた生き方があります。

第1は“現世幸福主義”つまり、明日が約束されないのなら今日幸福でありたい、今幸せであればいい、という考え方です。

第2は“マイホーム主義”です。ある精神医学者はこれを『要塞家族』と呼びました。家族の周りに砦を築いて人を中に入れようとしないし、外にも出て行かず閉じこもることを意味しています。ある年の正月の三が日、初詣に出かけた人が8,700万人という記録を作りました。初詣は国の安泰と五穀豊穰を祈る祭です。現在、初詣に行く人々はさまざまな願いを持っていきます。それは安心立命、家内安全、商売繁盛、無病息災、関西

学院大学合格などいろいろですが、それらは自分と自分の家族の幸せを願うものです。この時に、人の幸せを願い、世界の平和を願える人がどれだけいるでしょう。

第3は“システム依存”です。これは制度や行政にすべてを委ねるという考え方で、社会福祉は国家責任であり行政の問題だという考え方です。たとえば、家の前にゴミが落ちてると役場に電話をします。行政の方でも『すぐやる課』といったものを作るのが流行って、すぐに飛んで来てドブさらいをしてくれます。我々は手をこまねいて、身体を動かさず、口だけで責任を追及してきました。そこに阪神・淡路大震災が起きました。役所の人々も過半数が被災したために、行政が機能しないという事態が起こったのです。長田区の真野地区は住民活動の盛んな所です。そこでは、4人に3人が近隣の人々によって助けられました。区役所でもなく、消防でも警察でもなく、隣の人が倒れた家屋から助け出してくれたのです。行政が機能しなくなった時、これを補ったのが150万人のボランティアでした。それによって市民は最低生活を維持することが出来たのです。ここに“はんぶんこ”が取り戻されました。あのボランティア活動が、新しい“連帯”の芽生えとなってゆくことを、私は心から願っております。

こうした中で、教育も行政も福祉も医療も、改革の時代を迎えました。システムを転換しなければならぬということです。そこで新しい建物を建て、設備を施し、それらのシステムを変えつつあります。しかし、システム転換とは立派な建物を建ててバリアフリーにすればいいという問題ではありません。あるJRの駅でエレベーターの中に障害者が14時間閉じ込められるという事件が起きました。現在、障害者が乗れるエレベーターが付いている駅はまだ少なく、東日本では1,700の駅の中で100しかありません。事件が起こった駅は最新式の設備が整った駅でしたが、障害者が乗った車椅子からボタンに手が届かなかったのです。14時間も閉じ込められていたのに、誰ひとりそのことに気を配った人はいませんでした。どんなに立派なシステムを作っても、そこに人が関わらなければ機能しません。人と人の関わり、それが福祉の命です。

しかし、今日の私達が生きている時代ではテクノロジーが発展し、技術革新が進み、ますます人間の手間を省く時代になってきているのではないのでしょうか。大きな会社では社員の机の上にパソコンが1台ずつ配されています。コンピューターのキーをたたけば、同じ部屋の人だけでなく、地方の支社や海外の支店とも瞬時にしてコミュニケーション出来るという、実に能率的で便利な時代になりました。しかし、彼らが隣の席の人と話をすることはありません。話をすることは無駄であり、何か用事があればコンピューターのキーをたたきただけで、つまり会話がないうのです。会話のない社会がだんだん広がっています。

スーパーマーケットに買い物に行けば、店に入って出てくるまで一言も口を開く必要はありません。電車に乗る時には券売機にお金を入れて切符を買います。券売機が出回り始めた頃、よくお金を入れても切符が出てきませんでした。駅員に「切符が出てきません」と言うと、「本当にお金を入れましたか？」と聞かれたものです。文明が発達すると私達は機械を信用しますが、人間と人間の関係はますます距離を広げ、しかも不信になっていきます。21世紀は非人間化の時代です。しかし、福祉とは手間をかけるものです。手間を省く時代に、なぜ手間をかけなければならないか。それが社会福祉を勉強する諸君にとっての課題です。

### 社会福祉学科の“3つのC”

先ほど高坂先生からお話がありましたが、関西学院大学の社会学部社会福祉学科が目指しているもののひとつが“Comprehensiveness”です。今の時代は専門が分化し、それぞれの分野に閉じこもっていくことによって全体が見えなくなっているのではないのでしょうか。“Comprehensiveness”とは全体性です。これまで、医療は命を、福祉は生活、すなわち家族や地域を対象にしてきましたが、欠けているものがありました。それは“人生”だと思います。命も生活も“Life”ですが、“Life”とは何よりも私達の人生です。人生とは“生病老死”の全てであり、生きて、病気になる、老いて、死ぬという人生全体を包括的に見るという視野

が、これまで欠けていたのです。老いとは人生の下り坂ではありません。肉体は衰えますが、人間の内的生活は成長を続けなければならないのです。ホスピスは死を迎える場所ではなく、人生を完成させる所です。生きることを助ける所がホスピスであり、社会福祉は最後まで人生を共に生き続けることを支援する業なのです。そのために諸君は勉強を行っています。

“Competence”とは、諸君が勉強し、知識を得て、技術を身に付け、経験を重ねて、問題に対応する能力のことです。では、能力を身に付けて何をするのでしょうか。ベーツ院長の言葉である“Mastery for Service”が表わされているように、自分の持っている能力、才能の全てを人のために用いることが関西学院の精神です。勉強し、研究を行い、技術を磨くことは、人のためにサービスを行うことでしょう。しかし、その根底に流れなければならないのが“Compassion”です。

“Compassion”とは“passion”つまり情熱を傾けることであり、人への優しさを意味します。阪神・淡路大震災の翌週には神戸に行きました。三田から神戸へと入って行った時、雨が降っていました。たくさんの若いボランティアが働いていましたが、その若者達が雨の中、自分の身体を濡らしながらも救済物資だけは濡らすまいとひたすらかばいながら避難所へと運んで行く姿に、私は感動しました。これが無関心・無責任・無気力といわれている若者の実像なのかとも思い、彼等の中に優しさを見たのです。『優しい』という字は『憂い』に『人』が関わると書きます。優しさとは、人の憂いを分かち合い、苦しみを共有することによって育つのです。それが“Compassion”です。“passion”は苦しみです。その苦しみを自分のものとし、自分も一緒に担うことが出来るかどうかを問われるのが“Compassion”です。

乙武さんという方が『五体不満足』という本を出版され、ご承知のようにベストセラーになっています。彼には両手両足がありませんが、明るく、爽やかに、たくましく勉強し、今は社会活動を行っておられます。彼が生まれた時、病院は両手両足がないことを母親に告げる勇気がなく、40日経ってようやく母親との対面の機会が設定されました。赤ちゃんを見て母親は失神するのではな

いかと心配して、ベッドまで用意していたのです。けれども乙武さんの姿を初めてみたお母さんは「まあ、かわいらしい」と言いました。これが“Compassion”です。母親と父親に愛情を持って受け入れられたが故に、今彼は自分の愛を人々と分かち合うことが出来るのです。

戦後、滋賀県で糸賀一雄というソーシャルワーカーが、知恵遅れの子どもの仕事を行いました。知恵遅れの子どもの可愛そうだから光を与えてやろうという時代に、彼は「この子らを、障害児を世の光にしよう」と言って仕事をしました。おそらく糸賀一雄は、知恵遅れの子どもの光を見たのです。その光を見ることが出来るかどうか“care”です。“care”という言葉は“カルース”という言葉から出てきたものです。“カルース”とは『愛する』という意味であり、『価値ある』という意味でもあります。自分がサービスの対象とする人に、本当に愛するべきものを、価値ある光を見出すことが出来るかどうか、それが福祉の仕事をする者にとっての宿題です。

聖書には「自分を愛するように、あなたの隣人を愛しなさい」という有名な隣人愛の教えがあります。しかし、隣人を愛することなど出来ません。私は若い頃、ある朝ひとりのお母さんの訪問を受けました。その方は部屋へ入って来るなり「泣かせてください」と言って、部屋の隅に立ったまま泣いているのです。5歳ぐらいの男の子をおんぶしておられました。その子は明らかに脳性小児マヒでした。泣き終わったお母さんはこう言いました。「バスに乗って身体の不自由な子どもを傍らに降ろし、不安定なので肩を抱いて一緒に座っていました。すると、次の駅で同じ年頃の健康な男の子を連れた母親が乗ってきて向かい側に座りました。子どもがいたずらを始めたので母親は叱っていたのですが、なかなかいたずらを止めない子どもにこう言ったのです。『そんないたずらばかりしていると、おまえもああいう子になるよ』と言って私の子を指差しました。私は大抵のことには耐えてきましたが、今朝は泣かずにはいられません」

もう40年以上前のことですが、若かった私は胸が熱くなりました。そして、力はないけれども、この子のために何かしようと決心しました。それ

が脳性小児マヒのプログラムを始める動機となったのです。なぜ決心させられたかという、「そんないたずらばかりしていると、おまえもああい子になるよ」と言って障害児を指差した母親の姿を、私自身の中に見い出さざるを得なかったからです。人の子よりは自分の子、人を踏み台にしても立たせたい、前に進ませたいというのが親の願望です。人間は自己中心的です。それをキリスト教では罪と言います。我々は罪人であり、私は自分の罪を自覚しました。隣人を愛することは出来ません。しかし、聖書は「あなたの隣人を愛せよ、人と共にあれ」と教えています。一体、人と共に生きるとは、どういうことなのでしょう。

アメリカの視覚障害児の施設に行ったことがあります。正面玄関に大きな写真が掛けてありました。小学校2～3年生のふたりの視覚障害を持つ男の子の写真で、ひとりの子がもうひとりの子の肩を抱いて、耳元で微笑みながら何かを語りかけており、聞いている子どもが上の方を向いて、にこっと笑っている可愛い写真です。ひとり白人で、もうひとり黒人でした。写真の下には『The blinder also color blider』すなわち、『視覚障害者は色に対しても識別ができない』という意味の言葉が書いてありました。先天盲の人は、見える、ということがどういうことかがわかりません。黄色なのか、緑色なのかもわからないのです。なぜ、こんなあたりまえのことが書いてあるのかと考えながらしばらく立って見ているうちに、私ははっとさせられました。

それは『color』という言葉です。アメリカ人にとって『color』は特別な意味を持ち、皮膚の色をさす言葉、すなわち皮膚の色が黒いか、白いか、黄色いかということの意味をします。そして黒人は『colored』=『色のついた人』として差別されてきたのです。アメリカは今、そのことで苦悩しています。私は、この子どもたちは目が見えないが故に、人種の違いを超えて肩を抱きあい、にっこりと笑ってられるという意味なのだと理解しました。

私は目が見えます。それ故に見なくていいもの、見てはいけないものを見たいと思うのです。それでいながら、本当に見なくてはいけないものを見分ける目を持っていません。相手が誰だろう

と気になり、時には一歩も進めなくなります。私の持つ偏見です。視覚障害者は、相手の顔も皮膚の色も見えないが故に、相手が誰であれ、その人格の深みにまでおりにいく可能性を与えられる人なのです。

福祉とは、出会いとは、私のように目は見えても心の目が曇っている者と、目は見えなくても心の目が開いている者とが巡り会うことによって、お互いの魂の目を開きあうことです。そしてそれが人と人のふれあい、すなわち“Compassion”ではないでしょうか。

健康を与えられ、人が人を助ける。人が人に仕え、人と人が共に育ち合い、共に生きることが出来るということは、何という幸せであり、喜びであり、人間的光栄なのではないでしょうか。

## 〈社会学部社会福祉学科開設 記念シンポジウム〉

## 『社会福祉におけるコンパッション（人への思いやり）』

|   |   |   |       |
|---|---|---|-------|
| 蛭 | 江 | 紀 | 雄*    |
| 牧 | 口 | 一 | 二**   |
| 室 | 田 | 保 | 夫***  |
| 高 | 田 | 真 | 治**** |

高田 先ほどは阿部先生から非常に感動的なお話を伺うことが出来ました。これから、阿部先生のお話を受ける形で、『社会福祉におけるコンパッション（人への思いやり）』というタイトルでシンポジウムを開催させていただきたいと思います。

これまで繰り返し語られておりますように、社会福祉学科開設における教育理念とも言えるキーワードとして3つの“C”を掲げたわけですが、その3つ目の“C”である“Compassion”について、本日お集まりいただいた先生方のお話を伺いながら、私達一人ひとりが考えてみたいと思います。浅野先生や高坂学部長がおっしゃったように、学問や理論、知識、知識としての理論、方法論や技術という面からだけではなく、倫理や哲学、心についても考えていきたいと思ひます。

本日は3人の先生方にお越しいただきました。それぞれに多様なお仕事をなさっておりますが、それについてはお話の中で伺うことが出来ると思ひますので、ごく簡単にご紹介をさせていただきます。

まず、蛭江紀雄先生は1941年に愛知県にお生まれになり、広島基督教社会館と特別養護老人ホーム清鈴園園長などを経て、現在廿日市高齢者ケアセンターのセンター長を務めておられます。また、広島県関係の色々な委員会や審議会、あるいは広島大学をはじめ近隣の大学の講師としてもお仕事をなさっております。

牧口一二先生は1937年に大阪でお生まれになりました。本業がグラフィックデザイナーでいらっしますが、今日では障害者関係のいろいろな活動に従事しておられ、そちらの方がお忙しいと伺っております。最近新しく始められた活動の中には『被災障害者支援～ゆめ・風・10億円基金』という阪神・淡路大震災で被災された障害者の方々との協働の事務局長であり、その他に障害者文化情報研究所の所長や、おおさか行動する障害者応援センターなどの活動の他、大阪府・大阪府関係の委員会や審議会の委員、大阪市立大学や関西学院大学の講師としてもおいでいただいております。

室田保夫先生は1948年京都にお生まれになりました。高野山大学の教授を経て、今春関西学院大学の専任教授としてお迎えすることが出来ました。先生のご専門はキリスト教社会福祉思想史で、特に留岡幸助や石井十次、あるいは山室軍平という方々を中心とした社会福祉思想史、あるいは社会事業史についての研究をなさっております。

ご紹介いたしました3人の先生方によってシンポジウムを進めてまいりたいと思ひますが、本日のシンポジウムではレジュメを用意しておりません。先生方には自由な思ひで『社会福祉におけるコンパッション（人への思いやり）』について、それぞれのお仕事や経験を通してお話していただきたいと思ひます。それではこれより、おひとり

\*廿日市高齢者ケアセンター センター長

\*\*障害者文化情報研究所 所長

\*\*\*社会学部社会福祉学科 教授

\*\*\*\*社会学部社会福祉学科 教授

20分間ずつお話をいただきまして、その後質疑応答などを進めさせていただきたいと思います。それではさっそく蛭江先生からお願いいたします。

**蛭江** ご紹介いただきました蛭江でございます。私が社会福祉を仕事として選んだ理由についてまずお話しします。私たちは自分の人生のほとんどの時間を仕事に費やすわけです。ですから、できるだけ意義のあることのために時間を使いたいと考えて選択したのが福祉の仕事でした。人と労苦を共にする所に自分の身を置くことによって自分の人生を生きていきたいと考えたわけです。これは何も高い志から生まれたわけではありません。そういう所に身を置かないと、結局は自分だけのために時間を使ってしまいうるに違いないという自分の弱さがそこに身を置かせたというのが、偽りないところなんです。昔は社会福祉を仕事として選ぶと言っただけで「まあ、偉いわね」と言われたものですが、決してそうではなく、自分の弱さがなされたことなのです。

また、社会福祉を選択することになった理由のひとつとして、私の生い立ちを話してみたいと思います。皆さんにとっては大昔の話だと思いますが、私にとってはついこの間のことでもあります。ご紹介いただいたように私は1941年に生まれました。父は愛知県の名古屋の出身で、母は長野県の茅野市、蓼科の近くに実家がありました。父は私が2歳の時に戦争にかりだされたので、私は父の顔を知りません。当時、夫が戦地に赴いている間に残された妻達の思いは、夫が戦争から帰ってきた時に子ども達を死なせていたのでは申し訳がない、何としても育て上げなければ、というもので、私の母も同じでした。戦争の末期になると名古屋も空襲がひどくなり、目の前で町が焼けていく中、母は私ともうひとりの姉を連れて長野県に疎開しました。

名古屋からSLの蒸気機関車でゆく道中はトンネルに次ぐトンネルで、どんどん石炭をたきあげながら登っていきます。蒸気機関車の車体は本来真っ黒なのですが、たくさんの人がしがみついていますので、乗客の白いシャツでSLは真っ白になっていました。あまりの人の多さですからデッキに立っているのが精一杯で、トンネルをくぐる

度に煤煙で何度も窒息しそうになり、もう死ぬんじゃないかと思いがらうやく長野県にたどりついたことを思い出します。

当時、疎開した子ども達は大変いじめられたもので、私も例外ではありませんでした。母の実家に疎開したのですが、家族が留守をしている間に電気を切られてしまったのです。はじめは故障かと思いましたが、そうではなく「出て行け」というサインでした。しかし出て行く所がありませんので、そのままランプで暮らす生活が始まりました。周りの家には煌々と電気がついているにもかかわらず、私は小学校4年生までランプで生活をしていたのです。家族の中では私が一番小さかったので、ランプを磨くのが私の仕事でした。

母は村の人達の畑の仕事を手伝わせてもらっていましたが、その程度の収入で生活が出来るはずはありません。そこで、戦後の生活保護の受給者になりました。母は働きに行っていましたので保護費が支給される日に役場へ行くことが出来ず、子どもの私が代わりに行って役場の高いカウンターの職員に声をかけてもらっていました。今思うに、よく子どもに渡してくれたと思います。生活保護をもらって暮らしている者は一人前ではない、という時代です。ですから、たとえ履物がぼろぼろになっても、村中の子どもが買いかえてからでなければ、生活保護世帯の私は何も買うことが出来ませんでした。また、たまたま運の悪いことに村長の息子と同級生で同じクラスでしたので、彼より成績が良くてもいけません。あれやこれやと因縁をつけられてはいじめられた長野県での生活でした。

私は一度だけ母に物をねだったことがありましたが、母が大変嫌な顔をしたことは今でも忘れられません。これは言うてはいけないことを言ったんだ、ということが子ども心にもよく分かって、それ以来母に何かをねだったことはありません。ですから、母は「うちの子どもはとても良い子だ」と言いましたが、これが私のゆがんだ性格を作った一番大きな要因です。とにかく雨露さえしのげればどこでもいい、と子どもなりに考え、村中の屋根のあるほったて小屋をさがし歩いたことを鮮明に思い出します。これが小学校時代までの私の思い出です。

戦後の混乱が落ち着いた頃に、父方の父、つまり祖父が「畑もない者が田舎に居てもしょうがないから、名古屋に出て来い」と言ったので、私達は名古屋に戻り、母子寮で暮らし始めました。その当時から、私は『慰問』という言葉が大嫌いになりました。『慰問』の来る日には必ず母子寮から逃げていました。今だに私は『慰問』という言葉は使いたくありません。

もうひとつ私の中でひっかかっている事柄があります。私は中学校の頃から教会学校に通い始めましたが、教会学校が終わると必ず孤児院、今の児童養護施設へ遊びに行っては夕方家へ帰るという日曜日を繰り返していました。孤児院から帰る時に、いつも私の姿が見えなくなるまでみんなが一生懸命手を振って見送ってくれるのですが、その時はと気づいたのです。まるで「私は帰る所があるけれども、あなた方は帰る所がないだろう」ということを言いに来ているように思えたのです。私の中ではこのことが非常に心に残っていて、その時から「中途半端なことをしてはいけない」と思っていたことが、後に社会福祉の世界に身を置くことになったのではないかと思います。多分そうすることであの時の自分を許してもらおうという気持ちになったのかもしれない。

また、自分自身のキリスト教の信仰が、社会福祉の仕事を始めるきっかけになりました。当時は社会福祉では飯が食えませんでしたから、仕事とは言えなかったかもしれません。社会福祉を自分の仕事として選択するという事は、自分の生活はとりあえず横におくという決心が必要な時代でした。ですから、私は今だに「こうして毎日飯が食えるだけでもありがたい」と思っていますが、うちの子ども達はそれでは満足していないようで、これがわが家の世代間のギャップになっています。

その後、高等学校から大学まで私は東京で過ごしました。高等学校時代は、夕方4時半から夜間部の小使いとして働きました。夜間部の先生方の夕食を手配したり、授業が終わった後は学校中の戸締りをしたり、校舎の屋根裏に住み着いていた泥棒をつかまえたりしたこともありました。

大学へ通うゆとりはもちろんありませんでしたので、どうしても大学で学ばなければならないこ

とがあるのかどうか、将来何を仕事として選択するかをこの時点で考えさせられました。そして社会福祉を選んだ私は、どうしても勉強しておきたいと考えたのです。夜学で社会福祉が学べる大学は明治学院大学の夜間でしたので、昼間は銀行に勤め、夜は明学へ通いました。

また、大学時代はスラムに入り浸っていました。ここには単身で蒸発してきて暮らす地域と、家族全員で蒸発してきて暮らす地域の2つがあり、私は家族が住む町で、学校へ行かない時間のほとんどを過ごしました。むしろ、スラムへ行く合間に学校へ通ったと言ったほうが正しいかもしれません。昼間は、仕事にあぶれて酒に酔っ払った大人と、蒸発してこの町に来たのですから転校手続きができずに学校に行けない子ども達であふれていました。子ども達は実にたくましく生きており、ここで私は非常に多くのことを教えられました。余談ですが、私は食べることに非常に神経質なところがあって、たとえ家族であっても、箸を渡される時に口に入れる部分を持たれると食べることが出来ないほどでした。これでは社会福祉の仕事をするのは無理だと思ひ、スラムに出入りしながら残飯を食べるトレーニングをしたのです。スラムで一番のごちそうは、大きなホテルの残飯を集めてきて、再度煮直した料理でした。これを食べるためには非常に勇気が必要でしたが、そのおかげで今はどんなものでも食べられるようになりました。みなさんには想像もつかないことだと思いますが、そんなことから始めないと社会福祉の仕事は出来ないという時代だったのです。

私は現在、特別養護老人ホームの施設長を務めておりますが、本来私は入所施設には全く関心がなく、地域の福祉に関心を持っていました。特別養護老人ホームの仕事をしている今でも、私の目指しているところは地域の福祉です。どんなに施設の水準が上がったとしても、地域の福祉のレベルが高くならなければ意味がない、というのが私の思いです。ですから私が現在一生懸命取り組もうとしていることは、“地域の人々が自分達でつくりあげていく福祉”であり、それをお手伝いしたいというのが、私が福祉の現場に入ってから一貫して考えてきたことです。どれほどのことが出来たかはわかりませんが、施設には限界がありま

す。施設の機能は、単に入所したり、利用する方のお手伝いをするだけではなくて、住民の意識と活動を高めていく支援を行うことです。さらに、住民と住民、住民と行政、住民と専門職との間をつないでいくキーステーションとしての役割を担っていかなければなりません。私はずっとこのことを願いながら仕事を進めてまいりました。

こうした中で、現在廿日市では住民の人々がいろいろな取り組みを始めており、私達も多くのことを学ばせてもらっています。しかしながら“地域で支え合う”ということを一生涯懸命進めてみればみるほど、結局は“自分の生き方を人に押し付けるということを超えられない自分”をお互いの暮らし方の中に発見します。しかし、本当に人と人が支え合える街をつくっていくためには、人にはいろいろな生き方や考え方があるということをお互いが受け入れ合える地域をつくる必要があります。そうでなければ、自分の考え方を受け入れたら、通じ合える人とは支え合えるけれども、自分と相容れない暮らし方をしている人は排除し、非難するという結果に終わってしまいます。こんなに一生懸命やってあげているのに、という最後の台詞が出て来るのです。これでは本当の意味での地域の支え合いは生まれてきません。「そんな支え合いの街からは私は逃げ出したい」というのが、小さい頃から私が肌で感じてきたことです。お互いにいろいろな生き方や考え方があるもの同士が何とか受け入れ合い、かつ支え合っている街をつくらなければ、本当の支え合いは実現しないのです。

そこで、私は『支え合うためのマナーの学習会』を始め、毎月1回地域の住民と一緒に数年間続けました。この学習会を行ったことは本当に良かったと思っています。“支え合う”活動は一生懸命推進していても、マナーを学び合うことをやっている街はあまりないのではないのでしょうか。専門職の人間であろうが、隣のおじさん、おばさんであろうが、お互いに支え合っていく上で身に付けておかなければならないマナーを学び合うところから始めなければならぬ現状が、今の日本にはあると考えます。

このように考えていくと、地域福祉あるいは福祉全体に言えることは“生き方づくり”であり“街

づくり”の大切さだと思います。人との関わり方を学び合うことなのです。先ほど阿部志郎先生もおっしゃっておられましたが、他者との関わり方の持ち方を身に付ける、学び合うというプロセスが地域福祉をつくっていくプロセスではないかと思っています。これは大変大きなテーマではありますが、そこをきちんとやっていかなければ単に各自の支え合いであって、本当に相手を尊重し、共に暮らし合う街づくりはできません。私はこのことを福祉の仕事の中で、多くのお年寄りと関わることによって教えられてきました。私達の仕事は、人に与えるサービスではありません。本当にいい仕事をしている時は、相手からもたくさんのお返しを与えられています。福祉の現場は毎日苦しいことの連続であり、決してカッコいいものではありません。しかし、どんなにつらくても続けていけるのは、自分が提供することによってそれだけ、あるいはそれ以上のものを相手から与えていただいているからです。私はいつも職員に「疲れだけが残る時は、いいサービスはしていないと思わなければいけない」と言います。「しんどさしか感じられない毎日は、相手にも良いサービスを提供していないというサインだ」と。これは、私自身にもずっと言い続けてきたことであり、忘れてはならないことだと思っています。

**高田** ありがとうございます。先生の生い立ちを通して、どういう思いを持って今日のお仕事を進められているかということをお話していただきました。先生の書かれた書物の中には「福祉の仕事を通して自分自身が豊かにされる」という表現がしばしば出てまいりますが、それは先生の生い立ちや経験の中から生まれてきたものなのではないでしょうか？

**蛭江** それほど深く考えたことはありませんが、多分そうだと思います。私がいつも言っていることですが“関係性”ということ、すなわち関係の“質”が福祉のサービスの“質”だと思っています。多くのお年寄りのお世話をさせていただくことによって、生きるということはどういうことか、年をとるとはどういうことか、本当にたくさん教えられていることを、理屈を超え

て、率直な気持ちで書いているだけです。

**高田** ありがとうございます。では続きまして  
牧口一二先生にお話していただきます。

**牧口** みなさんこんにちは。私は小さな頃から足が動かなくて、3年ほど前までは松葉杖を使って歩いていましたが、今はちょっと年をとったので車椅子に乗ることも多くなりました。

私はいつも敢えて「こんな人生を与えてもらったのだ」と言うのですが、時には「そんなきれいごとを言うな」と非難されることもあります。もちろん表面的にはしんどいこともたくさんあります。たとえば、松葉杖について階段を登るのはみなさんよりもしんどいと思いますが、私は1歳の頃から足が動かないので、2本足の人がどれほど楽に階段を登っているのか、あるいは2本足の人でも階段を登るのはしんどいのか、正直なところわからないんです。自分の身体で感じるしんどさで比較しているだけなのです。若い頃は私なりにもっと楽に階段を上がっていましたが、年をとってしんどくなってきたので「駅にエレベーターをつける運動をやろう」というように、必然的に障害者の運動をやってきたような次第です。しかし「障害があるとしんどいだろう」とみんなから言われますが、先ほど蛭江先生がおっしゃったように、障害を持つことによって与えてもらったことのほうがずっと多いのです。だからこのように元気に生きているのではないかと思います。これは決してきれいごとではなく、うまく言葉では表現できませんが、心の底からそう思いながら人生を送っています。

ところが、障害者運動をやっていると、世の中には「あれっ」と思うことがたくさんあるんですね。よく考えれば、世の中にはいろんな状態があるということはみなさんもおわかりでしょうが、人間はよく考えずに直感で動いていることが非常に多いように思います。たとえば、今日のシンポジウムは“人への思いやり——Compassion”をテーマにしていますので、そのことに絞って少しお話ししてみたいと思います。

まず“思いやり”という言葉を考えてみた時に、一般社会の中ではなんとなく一方通行になってい

るような気がしませんか？ 実際は障害者の人達も、健常者の人達のことを思いやっています。お年寄りも、元気な人達を思いやっていますし、お互いさまなんです。ところが悲しいことに、一般社会の中で“人への思いやり”という言葉が出てくる時には、必ず『思いやる人』と『思いやられる人』に分かれてしまいます。私自身が障害者として生きてきたので、こういう言葉に対して敏感なのかもしれません。あるいはひがんでいるのかもしれません。けれども今の社会ではやはり一方通行のようです。

私が大学で講義を行うと、学生から「同情は差別ですか？」という質問を寄せられることがどれほど多いことでしょう。そんな時、私はいつでも「同情にもいろんな同情があるんや。人の気持ちになろう、つまり“共生”の気持ちで思いやりを持つ場合にも“同情”という言葉を使うし、人を見下げてしまう時にも“同情”という言葉を使う。だから“同情”という言葉そのものを差別や、というようなおおざっぱな考え方をしないで、もっと中身を考えてほしい」と言います。

障害者仲間では“同情”という言葉はあまりころよく受け取られていません。私のように障害があつたり、年をとっている人間は、みなさんから同情されたり、思いやりを受ける立場にいます。みなさんは決してそんな気持ちで言っておられるのではないかもしれません。関西学院大学の社会福祉学科も“思いやり”を教育目標の3つの柱のひとつになさっていますが、もちろん深い意味をいろいろと考えられた上でのことだと思います。また、先ほども申し上げたように、私はいろんな人から思いやりを受けて今日まで生きてきました。人から思いやりを受けることがどんなにありがたいことか、どれほど力強いことかは身体中でわかっているつもりです。その私でも、“同情”や“思いやり”という言葉を使ってしまうことは間違いだと思います。

みなさんは健常者の立場で私の話を聞いておられる方が多いと思いますが、「私達は決して、そんなイヤな意味の“同情”や“思いやり”をしているつもりはない」とおっしゃるかもしれません。けれども、みなさんが直接同情された時にどのような反応を示されるのでしょうか？ 本当にそれ

を「嬉しい」と思えるほど心を開いておられるなら、私は敢えてこんなことは言いません。でも実際は、自分が同情されたら怒る人が世の中にはたくさんいるんです。しかも「なんで“同情”があかんのか？」という立場の人ほど、自分が同情された時にもすごい怒りが出てきます。まるで、自分が一人前扱いされていないような錯覚が起こるのでしょね。人から力を借りたり、人から思いを寄せてもらった時に「ほっといてちょうだい」という思いが、どうしても起こるんです。この気持ちは一体何なんでしょう？ どこから生まれてきたんでしょう？ このことを社会福祉を考える時に忘れないでほしいと思います。

私は“Compassion”という英語がどんな意味を持っているのか、詳しいことは知りませんが、日本語の“思いやり”という言葉に表現なさっているのだとしたら、私は“想像力”という言葉におきかえてみてはどうだろうと思います。つまり、障害とか、老いるとか、福祉という概念を小さな枠の中だけで考えるのではなく、「私たちは自分ひとりでは絶対に生きていけない生き物なんだ」ということを、この身にひしひしと感ずることから始めてほしいと思います。人間は、自分ひとりでは生きていきません。スーパーマンであろうが、両手両足が全く動かない重度の障害者であろうが、自分ひとりでは生きられません。人に支えてもらったり、思いやってもらったり、助けてもらったり、いろんな力を貸してもらいながら生きていくんだという当り前の原点に、まず戻ってみることが一番大切だと思います。

“想像力”の話になったので思い出しましたが、私は大阪市立大学で20年ほど非常勤講師の仕事をしており『障害者と人権』という講座を担当しています。今春の新生生との一番最初の授業で『五体不満足』の話になりました。300万部という販売部数はすごい数字ですから、学生達がどれくらいこの本を読んでいるのか興味があって聞いてみたんです。すると、約300人ぐらゐの受講生の中で10分の1ぐらゐは手が挙がりました。ちなみに「僕の本を読んだ人は？」と聞いたら、バラッ、バラッでしたね（笑い）。これが300万部の力なんやと思いました。私の本の中で一番売れているものでも3万部です。でも、福祉関係の本で3万部

といえはすごい数字なんですよ（笑い）。それで、「さすがやなあ、300万部はすごいなあ」というやりとりをしながら、「実は僕、まだ読んでないんやけど、あれだけ大騒ぎになってるし、書評はちらっと読んだし、テレビで乙武君がしゃべっているのを聞いて、どんなことが書いてあるのか大体わかったんや」と、偉そうに言ってしまったんです。

やっぱり、傲慢なことは言ったらあきませんね。講義の最後には必ずコミュニケーションカード（疑問、反論、質問、感想など）を書いてもらうんですが、その日のカードには実にたくさんの方が「読まないでわかるとは何事か！」と書いていました。でも、実は読まないでもわかるということはあるんですよ。これはちょっと大げさに言う想像力の問題ですね。つまり、私は30年間障害者運動をやってきましたし、自分自身も足が動かない人生を歩んできました。だから、偉そうな言い方ですが、乙武君の話をちらちらと見聞きしたら、だいたいの主張はわかってしまったんです。このことをつい正直に口に出してしまったが故に、学生達から総攻撃を受けました。

それで、次の授業までに読んでおかないといかんかな、とも思ったんですが、どうしても“想像力”の大切さの話もしたかったので、読むのを我慢したんです。私は、自分が体験して考えたことしか講義では話さないタイプだったので、かなりつらかったですね。でも、なんとか想像だけで、次の授業で1時間ほどかけて『乙武君と僕』という話をしました。「乙武君の障害はこれこれで、彼は障害を“特徴”だと考えている。僕は“個性”だと言い続けてきたし、彼と僕とはなんとなく似てるな。生きてきた時代は全然違うけど、育てられた環境はものすごく似てると思うよ。僕は戦争中に生きてきたけれど、彼は1981年の『国際障害者年』の頃に小学校に入学するくらいの年で、この時代背景の共通点を僕はこう考えているんや」と。

それでも学生諸君は納得してくれず、「読んでもないのにそんなに偉そうに言えるのか。どうして牧口さんは意地になって読まないんですか」と反論してきました。それで、次の授業までには読んでおくことにしました。私自身も、読ま

なかった時と読んだ後とでどこまで同じだったか、間違っていたかということに興味がありましたし、その違いを学生達に報告する必要があると思ったからです。

そうして本を買いに行くことにしたのですが、大阪の森ノ宮の駅前にある小さなキオスクに行ってみました。店の人に「『五体不満足』ありますか?」と聞いたら、「あります、あります。一番よう売れてます」と、店頭で積んである本を教えてくださいました。あのキオスクに積んであるんですよ（笑い）。

そんなわけで、一冊買って帰って読みました。読んでみると、私が想像していた以上に、生い立ちや障害も、そんなに大きく違わないなと思いました。みなさんは両手両足がないのと、足が一本動かないのとは全然違うと思われるかもしれませんが、私も松葉杖をつくことができない小さな頃は、地面を這いずり回って遊んでいました。乙武さんは幼い頃から車椅子に乗せてもらっていたようですが、学校の先生から地面を這うことを教わり、そのことによって彼の世界が広がったと書いてありました。このように彼と私はよく似た幼年期を過ごしているし、お互い出来ないくせにスポーツが大好きで、ふたりとも目立ちたがりです。

それにまだありました。「ちょっとはずれた人にひかれる」ところです。真面目な人は苦手なのです。ちょっとややこしそうな人を“いいな”と思ってしまうタイプなんですね。親から育てられた様子を含めて学友や先生との関係など、びっくりするほど似ていました。時代が違うにもかかわらず、これほど生育の様子が似ているのは、おそらく障害があってこの世の中を生きていく中で、同情や手助け、時には私達の身体を見て「気持ち悪い」という人との出会いなど、いろんな反応を全身に浴びながら生きてきたからだと思います。そういう人間の考え方、感じ方の共通性は、時代を超えてあるんだなと思いました。

21世紀は、これまでとは違った新しい障害者像が生まれてくるかもしれません。生まれつきの性格ももちろんあるでしょうが、人間は環境によって育ち方も相当違ってくるものだと、彼の本を読みながら痛感しました。

また、年の差を含めて乙武君と私の違うところが3つ見つかりました。まず、頭の良さが違う。次に、顔が違う。彼は本当に人から好かれる顔をしていますね。そして、ユーモアの豊かさが違う。私もわりとダジャレが好きなのですが、それでも「負けたな」と思うシーンがいくつかありました。彼はとても器用に言葉を使っていますが、あの器用さは僕にはなかったですね。もう一つの違いは、彼にはあまり陰を感じない。私は陰がある。陰っていいもんでしょ（笑い）。

こんなくだらない話で、堪忍してください。

**高田** ありがとうございます。社会福祉学科では“Compassion”をひとつのキーワードとしていますが、このことを再考し、その意味を問い直さなければならないということを教えられました。それに関連して“思いやる”“思いやられる”、また“同情する”“同情される”という様に、ふたつに分けてしまうという問題を指摘していただきました。

ここで牧口先生の著書をご紹介しますが、NHK出版から『ちがうことこそ、ええこっちゃ』という本を出版されておられます。この本のタイトルは最初『ちがうことこそ、ばんざい』だったようですが、どうして変えられたのでしょうか。

**牧口** 『ちがうことこそ、ばんざい』という言葉は18年間使い続けてきましたが、広島県の教職員組合で講演させてもらった時に、会場から「“ばんざい”は天皇制から生まれた言葉である」という指摘を受けたのです。私自身も天皇制は差別の象徴だと感じていましたので、「そうだったんですか、知りませんでした」と、「ばんざい」を使っていたことを素直にあやまりました。それで「あなたは嬉しい時にどう言われるんですか?」と聞いたら、「私は“ブラボー”と言います」とおっしゃいました（笑い）。別に日本語でなくてもいいとは思いますが、これではなんとなく、とってつけたような感じがしませんか? 私は、こっちが駄目だからこっち、みたいな窮屈な考え方はいやですし、「今は“ばんざい”が庶民の言葉になっていますから許してください」と言ってそのまま10年ほど使い続けていました。すると一昨年、奈良

の高校の先生が、“ばんざい”がいかに天皇制と密着しているかという資料を送ってくれたのです。読んでみるとその理由がおもしろくて……、今日は時間がないので紹介出来ませんが、『ちがうことこそ、ええこっちゃ』を読んでください(笑)。ここまで教えてくれる人がいるのなら“ばんざい”はやめようと思って、“ええこっちゃ”に変えました。

**高田** わかりました。さて、おふたりの先生から、それぞれの経験やお仕事を通してお話をしていただきましたが、室田先生からは研究を通してお話をさせていただきたいと思います。先生は社会福祉思想史、あるいは社会福祉事業史を専門とされていらっしゃると思いますが、どういう思いでそれらを研究しておられるのか、その背景などを伺ってみたいと思います。

**室田** ご紹介いただきました室田でございます。この春から関西学院に赴任いたしました。先ほど乙武氏の『五体不満足』の販売部数の話が出ましたが、私の研究書の発行部数は500から1,000部で、専門の研究書になりますと、それくらいものではないでしょうか。300万部という数字を聞きますと、如何に我々の世界が小さいものであるかを思い知らされました。私は歴史を専門に研究してきましたので、おふたりのような実践に基づいた素晴らしいお話は出来ませんが、まず最初に、何故このような研究を始めたかについてお話していきたいと思います。

私は1968年に大学に入学しました。京都はもちろんその頃はスチューデントパワーが華やかかなりし時代で、関西学院も学生運動が活発になされた時代であったと記憶しています。その当時、多くの学生は“政治”や“天下国家”を議論していた世の中で、また社会福祉を勉強していくということにおいて、今日ほど市民権を得ていたわけではなく、むしろ“奇異”に感じられた時代でもありました。関学の社会福祉学科の“3C”に拘ると、当時の“3C”と言えば“カー”“クーラー”“カラーTV”のことで、この3つが当時の生活の目標という時代であり、この“3C”を連想する世代です。また“パイの論理”といいますが、経済

成長こそが多くの分け前を与え、人間を幸福にするという時代で過ごし、公害や都市問題の深刻化、革新自治体の登場と、そろそろその考え方に疑問が投げかけられ始めた頃でありました。私は学部の頃はあまり社会福祉に熱心であったわけでもなく、大学院に進んで歴史を学び始めて、面白さが分かってきたように思います。今日ここに居られる1回生の方で、まだ社会福祉というものにじっくりこない方は、先ず一番関心あるものから始められることによって、社会福祉に対する興味や広がりが出て来るのではないかと思います。

現代は少子高齢社会を迎え、社会福祉は時代を代表する学問として脚光を浴び始め、多くの高等機関で社会福祉を学ぶ学生が増えてきました。こうした時代なればこそ、しっかりした哲学や人間観が必要になってきます。21世紀を迎えるにあたり、社会福祉基礎構造改革や新しい福祉学の構築が叫ばれている中で、先ほどから述べられているように、本学の社会福祉学科が目指している“3C”を目標としていくことは、非常に意味のあることだと思います。よく「社会福祉は人である」とも言われますが、私の歴史研究は人物史とも言えるジャンルで、近代日本の代表的な社会事業家を研究対象としてきました。その中に留岡幸助、石井十次、山室軍平といった人物がいます。こうした有名な先覚者は他にも多いわけですが、たとえば仏教なら渡辺海旭、長谷川良信、また関学の関係ならライトハウスの岩橋武夫らを挙げる事ができます。

さて、留岡について少しお話してみたいと思います。歴史を勉強してみますとわかりますが、彼は日本社会福祉史の中で非常に大きな存在ですが、この人が如何にして社会事業家になったかという素朴な問いをしてみることも意味のあることだと思います。それは留岡個人における“Compassion”について、さらに実践あるいは思想の形成過程を考えることにつながります。また「温故知新」という言葉もありますが、時代の変革期を生きた人々の生き様や思想を考へてみることも重要なことだと思います。

留岡幸助については岩波新書に高瀬善夫氏が『一路白頭ニ到ル』という本を出しておられまして、コンパクトにまとまっていますので、是非読

んで頂きたいと思います。留岡が1864年、岡山県の高梁という所で生まれ、如何にしてキリスト教に入信していったかを知ることは、彼の生涯においてきわめて重要なことですので紹介しておきます。

留岡が少年期を過ごしたのは幕末から明治維新の頃ですが、彼は商家に養子に行きます。ある日、士族の子どもと喧嘩をして怪我をさせてしまい、養父の激昂をかうという体験をいたしますが、彼自身は正当防衛だと考えていたので、自分が怒られたことを理不尽だと思っていました。ある日、偶然にキリスト教の講演会に出席した彼は「士族の魂も町人の魂も神様の前では平等である」という言葉に心打たれ、キリスト教に入信していくわけです。今で言うところと当然なことですが、当時の風潮から察して、留岡にはきわめて新鮮かつショッキングな言葉であったわけです。入信した故に養父からも迫害を受けますが、敢然と信仰を守って行きます。ところで当時（明治20年代）、日本には「監獄と遊廓」という“二大暗黒”がありました。留岡はジョン・ハワードという監獄改良家に憧れていましたので、牧会生活の後、「光は暗きを照らす」をモットーにして、監獄改良を志し北海道空知集治監（現在の刑務所）に教誨師として赴任いたします。ここには2,000名以上の囚人がいました。そこで300名位の囚人に対して、個々に聞き取り調査を行い、生育歴や犯罪歴等を調べ、家庭や教育環境の大切さを痛感いたします。感化教育の重要性を認識した留岡はアメリカへ渡り、親炙していたエルマイラ感化監獄のブロックウエーらから多くのことを学んで帰国いたします。ちょうど日清戦争の終結の頃です。ちなみにブロックウエーの座右銘「**This one thing I do**」というピリピ書の言葉を『一路白頭に到る』と意訳して、彼のモットーともしています。

さて留岡は帰国して念願の家庭学校という感化院（児童自立支援施設）を創設いたします。ちょうどいまから100年前の1899年のことです。設立趣意書の中に「不良少年の多くは悪むべきものにあらずして、寧ろ憐れむべきものなり」「彼等の境遇を一転し、之をして善良なる家庭の裡に置かざる可らず」云々といった言葉があり、非行少年に対する“Compassion”が感じられます。そして

この家庭学校を起点にして留岡は様々な事業、活動を展開していくこととなります。

例えば留岡は民間の慈善事業をなしながら、日本の社会福祉の古典的書物ともいべき『感化事業之発達』（1897）『慈善問題』（1898）といった名著を刊行し、20世紀の日本社会における社会事業の方向性を指摘いたします。この中で彼は「学術的慈善事業」といった新しいキーワードを生みだしながら、「吾人は慈善問題を滞りなく解釈せんと欲せば宗教より出づる熱愛、学術の与ふる光明なかるべからず」と、それまでの宗教と道徳を中心にしたものから、科学的なものを加味したものへの転回を唱道していきます。19世紀末という慈善事業の黎明期にいち早くその事業の何たるかを世間に知らせていくためには、さしあたってその事業の原理、原則、根元から述べていく必要がありました。

第1章では「慈善家の本領」として人間の“慈善心”の普遍性を指摘しています。「人に怵惕惻憫の心あるは性なり、性なるが故に人の急迫を見聞して適當の助力を寄与するは自然の數なり」と人間自然の本性たる「人情的慈行」、これに留岡はヒューマニタリアン・ムーブメントとルビをふっていますが、“人道救護の精神”でもって助け合っていくことの大切さを論じています。

「慈善家の見識」という章では、慈善家たるものは「無告の民の心友たり保護たる者」と述べ、慈善事業家は誰からも顧みられない無告の民を、つねに自分の精神の奥深く、刻みこんでおかねばならない、「彼が眼底瞬時も無告の民あるを忘れざるなり」と述べています。また「慈善家の資格」では「理想的な慈善事業家」を論じて、第1は「無欲の人」であること、無欲すなわち大欲である、と。第2として「悠久持長に事を為す」、時を急がず長い目でみていく必要があるということ。第3に「慈善事業の知識を持つ」必要性、実践のためには周到な知識が必要である、いわば“**Comprehensiveness**”の必要でしょう。第4として「勇往直進」するような人。すなわち自分の良心に質してこれと認識すれば、周囲を気にせず進んで行くことの必要を説く。第5には「物質を与ふるに先ちて自己の心を与える」人であること。対象者との「同情同感」の心境、“**Compassion**”の進った

人。そして第6に「事務的才能に富んだ人」、まさに経営的センスをもった事業家である。このような慈善事業家を育てることによって、20世紀の日本の慈善事業を構想しました。今にも通用する視点もあると思います。社会福祉は20世紀になって現代のようなシステムとして発展してきましたが、その根本的な原点は歴史からも大いに学ぶことも出来ます。

留岡が100年前に創設した家庭学校は大正時代に北海道の社名淵に分校（現北海道家庭学校）を作りますが、牧野英一という東大の刑法学者が大正13年、分校を訪問し、「最後の一人の生存権」という講演を行っています。その中で牧野は留岡の事業を評しながら、99匹の羊より一匹の迷える羊を大切にしていくこと、このことが社会福祉の原点であるといった話をするわけです。さらに留岡は生涯1,000編以上の論文を発表していますが、その中に「貧民の友」というタイトルのものがあります。その中で「我儕御互に兄弟姉妹と云つて相睦み親しみますことは天父を一にする所に淵源しております。この原理より割り出す時は下等社会の人々も囚人も、病者も皆我儕の兄弟姉妹であります」と述べており、こうした箇所キリスト教に根ざしたヒューマニズム、人への思いやりが窺えると思います。

留岡の他にもう一人の代表的な社会福祉の先覚者として石井十次という人物について簡単に触れておきたいと思います。彼も一般にはあまり知られた人物ではありませんが、岡山孤児院という現代でいう児童養護施設を創った人物として有名です。最近では中学校の教科書（東京書籍）に「児童福祉につくした人」として「宮崎県出身の石井十次は、こうした子ども（養護の必要な子）の救済に生涯をささげました」と紹介されています。中学や高校でもっとこのような人物を教えることはきわめて重要であると思います。石井は孤児院を創り、多いときは1,200名にも達したものとなりましたが、彼もキリスト者で、彼の膨大な日誌には日々の祈りの中で実践していったことが記されています。彼は単に児童を救済するだけでなく、児童の自立を促す教育にも力を入れました。晩年は故郷宮崎の高鍋に児童を移し、植民事業、開拓事業を通してユートピア建設を試みまし

た。明治・大正期の日本社会福祉の黎明期の開拓者たちの多くは、今のような措置費制度のないとき、まさに事業としてやって行かなければならなく、そのためには明確な事業意識、強い情熱と思いやりを必要としたと思われます。留岡や石井のほかにも多くの素晴らしい実践家があります。そのような人々から多くのことを学びたいと思っています。

その時、思いやり“Compassion”をどのようにいかしていけばいいか。人権の問題は触れませんでした。一方が欠けても完全とも言えません。マックス・ヴェーバーは近代人を評して「魂のない専門家」といっていますが、如何に確固とした人間観を確立していくか、そうした問題を課題としていきたいと考えています。

**高田** ありがとうございます。ひとつ質問をさせていただきたいのですが、留岡幸助が家庭学校を設立した際に語ったとされる「憐れむべきもの」という言葉は“Compassion”に通ずるとお話しされましたが、これの今日の意味について、またそれに関連して社会福祉思想史を研究される意味をお話しくいただけますか。

**室田** 現在の社会福祉からみて、従来の慈善事業、社会事業といった時期に使用される言葉の意味も違っている場合があります。時代時代で使用される言葉の意味も変わってきます。例えば牧口さんのお話とも関連しますが、“同情”という言葉にしても、北村透谷は明治20年代中頃「慈善事業の進歩を望む」という論文を書き、同情の大切さを説きました。その時、“同情”という言葉は単に上の者が憐れむという意味ではなく、その時代、また透谷の全体的な思想の文脈で理解されるべき用語だということです。留岡が「憐れむべきもの」といった言葉の背景、それは彼の当時の位相、時代と思想の中で捉えるべきではないか、すなわち過去の人物や思想を調べていくということは、単に現代的な視点から腑分けしてしていくのではなく、その時代に生きた生身の生き様を追求していくことの大切さを考えています。留岡に引き戻すと、社会福祉はもちろん、慈善事業の何たるかも不明の時代にそういった言説を唱えていく

こと、そのことのダイナミクスを考えていくということです。そういう観点から、時代に生きた人物の具体的には喜怒哀楽、祈りの中で如何なる思想が生み出されていったのか、それがその時代、そして現代にどういったインパクトを持っているかを考えていくこと、そういう観点から社会福祉の思想史を考えています。

**高田** 教育の中で歴史はどちらかというと軽視されがちですし、特に今日は科学的な知識や方法が重視される傾向にある中で、“Compassion”や社会福祉思想史を勉強する重要性とは何なんでしょう。

**室田** 非常に難しいことですが、私は“Compassion (人への思いやり)”を考える中で、その“思いやり”の質が問われなければならないと思います。最近、荒井英子氏が『ハンセン病とキリスト教』という本を出版されましたが、ハンセン病に対するキリスト者の実践を考えていくとき、むしろ対象者から見ていく必要性を強調されています。キリスト者の憐憫だけでは見えてこないもの、時代に対する包括的な認識、対象者の人格理解、人権感覚がないとむしろまっとうな実践が為されないことの警鐘をなされています。すなわち“Compassion”はもちろん大切ですが、その質を問うことはもっと大切であると思います。

**牧口** 今のおふたりのお話を聞きながら思い出したのですが、何年前かに十三の博愛社で小学1年生の女の子が6年生の男の子になぐり殺されるという非常に悲しい事件が起きました。私も聖公会のキリスト者ですから飛んで行ったんですが、その時この事件は、現代の施設が非常に閉鎖的になっているということ象徴的に表わしているなと思ったんです。

戦後、家が焼かれて親も死んでしまった子ども達、つまり孤児達が街にたむろしていました。彼らは生きるためにかっぱらいをしながら食いつないでいました。そんな子ども達を警察が追い回して、つかまえては孤児院に連れて来て「こいつはいろんな悪いクセを持ってるから、気をつけや」と言いながら園長に預けます。その時に園長が「よ

くかっぱらいなんかしながら生き延びてくれたなあ」と言って受け入れたという話を思い出しました。ここに、私達が“思いやり”と言っている本当の意味の“Compassion”があるのではないのでしょうか。つまり、自分はゆとりがあるからゆとりのない人を思いやる、といったような一方通行の思いではなくて、その人間がどんな立場にしようが、ひとりの人間としてどんな思想を持っているか、哲学を持っているかによって、その言葉が人を救ったり、傷つけていくのではないかと思います。

**室田** それに関して、もうひとつだけ付け加えておきますが、先ほど留岡幸助の慈善事業家の典型について述べましたが、同じように山室軍平（日本救世軍の指導者）という人が『社会事業家の要性』という本を大正中期に書いております。これも100年近く前に書かれたもので恐縮ですが、その中で彼が第1に挙げているのは「社会事業についての知識」であり、これは有名な“3つのH”すなわち“HEAD”(知識) “HAND”(技術) “HEART”(心)の必要性和関連いたします。第2に「事務的である」ということ、アドミニストレーションと経営。第3に己を他人の立場に置くという「同情の必要」。第4に「人格の尊重」彼はもちろんクリスチャンですから「人皆神の子」「兄弟姉妹」という考え方。第5に「自ら助けしめよ」、その人の人格を尊重し、生活の自立支援に社会事業家の役割を見ていく。そして最後に「品性たらん人」、これは社会事業家本人が品格、品性を持っていなければならないと言っています。現在の“3つのC”にも通じるものがあるのではないのでしょうか。

**高田** それではここで現代の問題を考えてみたいと思います。先ほど鮫江先生は“関係の質”あるいは“関係性”ということを強調されておられたかと思うのですが、先生は別のところで『人間理解を深めることの重要性』について、“知識”“技術”“態度”の3つが必要であり、これらを通して自らを磨き、他者との信頼関係を形成することが重要であると述べておられます。このことについてぜひお話ししていただきたいと思います。

また牧口先生は、「震災などの大きな事故、事件が起こり、世の中全体が大騒ぎになった時には、障害がある人々は後回しにされるので、自分達で身を守ることが大切であり、人と人とのつながりを大切にしていこう」という趣旨で『ゆめ・風・10億円基金』の活動を行われていますが、最近の活動の中から「関係性の大切さ」について語っていただけますでしょうか。

**蛭江** “思いやり”について考える時に出て来るキーワードとして“共感”という言葉があります。痛みを痛みとして受け止められる、あるいは感じとれる感性というものがなければ福祉の仕事は出来ません。私は「社会福祉は人間に対するセンスが問われる」とよく言いますが、その感性を持っているかどうか、相手との間に信頼関係を築く上でとても重要になってくると思います。

福祉の仕事は信頼関係があって始めて出来る仕事です。ですから、福祉の現場では信頼関係をつくっていくことにとっても神経を使い、時間をかけて、ていねいに行っています。これが福祉の仕事の特徴だと思います。信頼関係をつくっていく上では、相手に“わかってもらえた”という感じを持ってもらうことが大事であり、同時に“決してこの人は私の暮らし方に土足で入ってくる人ではない”ということを感じ取ってもらうことが最も大切なことです。このことが福祉の現場にとって一番大きな力となってくるわけですから、その力をぜひ学んでいただきたいと思います。

“思いやり”という言葉はどう解釈していけばいいのかわかりませんが、現場の思いに引き寄せて表現してみると、そんな風になるのかなと思いました。

**高田** 今のお話の中に“感性”という言葉が出てきましたが、これは牧口先生がおっしゃった“想像性”にも通じるもののでしょうか？

**蛭江** はい、そのとおりです。

**牧口** 蛭江先生がおっしゃったことの中で非常に印象的だったのは、信頼関係をつくっていくためには時間をかけてていねいに行く、ということ

です。これはあたりまえのことのようですが、私達は忙しさのせい、まず先に信じてしまいたいんです。たとえば差別の問題にしても「あなたと私と一緒にいたら差別はおこらない」という風に、結論を急いでしまいます。人間はお互いに信頼してあたりまえ、信頼関係からまず始まると思っっているんです。この考えを大多数の人が持っている限り、施設ではいくらでも不正が起こります。このことを忘れないでください。

つまり「あの人が悪いことをするはずがない、知的障害者は正直で嘘をつくはずがない」というところから始めるのは間違いなんです。知的障害者だって、たくさん嘘をつきます。人は生きるために嘘をつきますし、それはたくましさであり知恵なんです。けれども、私たちはそうは受け取りません。うそをつく人はきたない人、いけない人というような一般概念が世の中にはありすぎて、それがたくさん間違いを起こしていると思います。信頼というものは付き合っ、付き合っ、お互いがつくり上げていくものであり、最初から存在するはずはありません。人と信頼関係をつくるためにはどれほどの努力が必要かということ、あらためて考えなければならないと思います。

さて『ゆめ・風・10億円基金』のことですが、阪神・淡路大震災の時に障害がある私達の仲間がどうだったかを少しお話しします。たとえばろうあ者の人が避難所に行って、一生懸命情報を得ようとしても、避難所ではマイクで「どこどこへ並べばおにぎりを配給します」と叫んでいますが、通訳する人が誰もいないのでわかりません。ようやくその情報をキャッチした時には、もうおにぎりはなくなっていました。また、全盲の人は慣れない避難所へ連れて行かれても、どうしたらいいか行動できない。そういう状況の中で、半壊の自分の家に舞い戻ってしまった障害者がいっぱいいるんです。いつ崩れるかもわからない家でも、避難所よりはマシだったんです。全体が大騒ぎしている時は、悲しいかな、障害がある人達のことは後回しになってしまうんですね。これが現実です。

また、障害者の家がたくさん半壊や全壊になってしまったことも、はっきりとした障害者問題の

表われです。障害者が家を借りようと思っても、なかなか貸してもらえません。家主さんからすれば目の見えない人、手足に障害がある人に家を貸して火でも出されたらどうしよう？ ということが心配になります。そして「すぐに消せないから困ります」というもっともらしい話で断わるようになってしまいます。でも冷静に考えてみてください。障害者が火を出したら、自分で消せないことはわかっています。つまり火を出したら、自分も焼け死んでしまうんです。だから、障害がない人よりも注意力は確実に高いんです。障害がある人となない人が火を出した比率を調べてみると、健常者と呼ばれる人のほうがよっぽど多い。こんなことはわかっているのに、世の中ではやっぱり障害者のほうを心配するんです。この障害者観が変わらない限り、障害者は自分の望む所に住めないし、災害が起こった時には即、被害につながっていくという悪循環が起こるわけです。

地震の以前から障害者運動をやっている時、私の頭の片隅にいつもあったことは「もし戦争が起こったら障害者はどんな扱いを受けるんだろうな」ということです。きっと“ただ飯食い”といった扱いをされるのではないだろうかと思っていました。そして阪神・淡路大震災という、ある地域だけでしたが、一種の戦争状態になってしまった時に、いろんなことが起こりました。

ただ、人間の社会はそんなに単純なわけではなくて、障害者であるが故に健常者よりも早く助けてもらった人もたくさんいます。あるいは、普段から障害者の助けあいのネットワークをつくっているのですが、交通渋滞のために避難所に救援物資が届かなかった時に、障害者の作業所や施設には別ルートで先に届いていました。彼らはそれを独り占めしたりはしませんでした。救援物資の中から食料品を集めて、大きなお鍋で千人分のトン汁を何度も何度も炊き出して地域の人々に配ったんです。私はこういう活動をしてくれた障害者の仲間がいたことに、とても励まされました。

それをきっかけに、いざとなった時のために普段からお金を集めておこうと考え、10年かけて10億円のお金を集めることにしたんです。あの時は、誰もがやさしくなって、少しでも他者の役に立ちたいという空気が大阪の街にも蔓延していま

した。それで、10億円をどうやって集めようかと考えたのですが、「10万円くれる人を1万人集めたらええんや」ということになったんです（笑）。

でも、あの時は本当にひとりの人が10万円出してくれる雰囲気があったんですよ。でも冷静に考えると10万円くれる人は1万人もいそうにないので、逆にしようと考えました。つまり10万円くれる人を10万人集めたほうが運動も広がるし、運動の意味合いも高まるからです。今年で4年目を迎えましたが、現在までに6,000人くらいの方が協力してくださっており、お金は1億5,000万円を超えたところですよ。あと6年ありますからこつこつ広げていきます。どうかみなさんも協力してください。

**高田** 今のお話に関連して、福祉の枠で考えることの問題について少しお話ししていただけますか。

**牧口** 私も、若い乙武君もそうですが、ふたりとも福祉の枠の中で物事を考えることにアレルギー反応を起こしています。なぜなら、本当の福祉というのがどうしても浸透していないように思えるからです。物事を深く考えないで、上っ面だけで受け取ってしまう人があまりにも多すぎる。

たとえば私達が障害者運動のイベントを開こうと考えた時、講演に有名な人を呼んで、出来るだけお客さんを集めようとしています。その時に、永六輔さんや水上 勉さんなど「ああ、なるほどな」という人しか出て来ないんです。私達は、障害者観とか福祉観、高齢者観といったようなこれまでの福祉のイメージを変えたいと思っていろいろと工夫するのですが、全く関係ない世界に生きている人は来てくれません。

ところが、NHKなどを通してあたってもらえるとすぐOKが出るんです。でも、対談の相手が私のような障害者だとわかると、とたんにNOとなるケースが実にたくさんあります。理由は、相手がこわがってしまうというか、普段自分は福祉のことは全く関係ない世界に生きているのに、相手が長年障害者運動をやっている男だと、何をっこまれるかわからないと思ってしまうらしい

のです。差別用語がどうのとか、なんとなくややこしい世界だと思ってしまいがちだし、頭の回転のいい人ほどそれを直観的に感じて近寄ってくれません。そんなわけで、なかなかイメージを変えることができないんです。ですから、ちょっとでも障害者や福祉のイメージの枠をとっばらえる、ダイナミックでやわらかい運動ができればいいなということ、いつでも願っています。

**高田** 蛭江先生にひとつ伺いたいのですが、先生の本が書かれたものを拝見すると民間社会施設の問題をいろいろと指摘されておられます。その中で、社会福祉の運動性、解放性、開発性を考え直さなければならぬと強調されておられますが、その上で、もうひとつの見方、考え方、価値観によってご自分の考えを進めておられると思います。それはやはり先生のご経験から、もうひとつの見方を問うていく重要性をお感じになっておられるからでしょうか？

**蛭江** 身近な例でお話ししますと、特別養護老人ホームに入所されるお年寄りの方は、心身が不自由で介護が必要な方です。今の世の中の価値観からいえば、まさにそういう人達は「あなたの人生は終わりだ」と宣言されたに等しいわけです。特別養護老人ホームも同じ価値観でお年寄りの世話をしていたのでは福祉とはいえません。特別養護老人ホームは、そういうお年寄りが入所された時に、元気であることだけが価値があることではなくて、たとえ寝たきりになっても人として生きることに何の価値にも何の変わりもないのだという、これまでの日常生活の中で自分でさえ気がついていなかったもうひとつの新しい価値観に出会う場所であればならないと思います。福祉の施設とは、そういう場所であるべきだと思います。

私は常に、もうひとつの立場、もうひとつの視点から考えてみたらどうなるか、ということを考えていなければ、福祉の仕事を本当に深めることは出来ないと思っています。絶望と思われの中に、なお可能性と希望が見出せる場になっていく努力をしていかなければならないし、そうでなければ本当の意味での福祉は成り立っていかないのではないのでしょうか。現場での仕事を通じて

私は常に、私自身にも、職員にも「もうひとつの見方が、もうひとつの価値観が、もうひとつのアプローチがあるのではないか」という可能性をいつも頭に入れて仕事をするのが大切だ」と言い続けています。そういうことの積み重ねが地域にひろがっていく時に、地域社会そのものの暮らし方も、生き方も共に変えていくことが出来るのではないのでしょうか。そして、その中で先ほどの「支えあい」の生き方づくりが、ほつほつと始められるのではないかと考えています。

**高田** 今日ここにお集りいただいた方々は社会福祉を実践されている人、研究されている人、そして多くは学生のみなさんですが、彼らに対して、最後に一言ずつお願いします。

**牧口** では、若いみなさんにメッセージをおくりたいです。私はボランティア活動とか障害者運動という世界で生きてきましたが、蛭江先生のお話にもありましたように、それらの活動を進めていく中で、自分の生き方を他者に押し付けてしまう傾向が非常に多い。しかも、熱心に活動する人ほどそういう傾向が強く表われます。

永六輔さんが『ゆめ・風・10億円基金』の呼びかけ人代表を引き受けてくださっています。永さんは非常にお忙しい方なのですが、ボランティアの一環として、あるいは『ゆめ・風・10億円基金』が少しでも増えるために無料で走り回ってくださっています。彼は、事務局を預かっている私たちに対して「自分がこれだけやっているんだから、もっとしっかりしろ」といったような態度はこれっぽっちも出さない方です。「私は、私の立場で出来ることをやっているに過ぎない」という思いが、言葉以上に態度に表われているんですね。そういう人につながっていると、こちらはとても楽です。こうしなければならぬという、追い詰められる感じが全くなく、かえってすごく励まされます。永さんがあれだけのことをやっているのだから、僕も出来るだけのことをやりたいといった気持ち、自然にわいてくるんです。そういう刺激の与え合いが、人間関係にとって一番理想的なのではないのでしょうか。

ところが、周りの人が動いていないのを見る

と、人間はついイライラしてしまいます。そして、それをなかなか口に出せないから、これみよがしにやっているところを見せる人もいます。そのあたりの気持ちをとっばらうことは難しいことですが、自分が何をやるかが問題であって、人のことをとやかに言うべきではないんですよね。「頑張れ、頑張れ」っていうのもよくない。

これこそ私が『ちがうことこそ、ええこっちゃ』と言っている意味でもあり、それと“柔軟な心”が福祉の一番基本になければならないと思っています。

**室田** “価値観の変換”“パラダイムの変換”あるいは“21世紀の福祉をどうするか”といった大きな問題がありますが、これらの問題はさておいて、社会福祉を“人と人との関係”“人間への思いやり”等と考えた時、やはり根本的な問題は“人間とは何か”ということをお断りし続けることかも知れません。学生の方はまず、“キリスト教の関西学院”に学んでいること、そして社会福祉学科が“社会学部にある”ということ意識してください。“人間とは何か”“社会とは何か”を常に根本的に考えていくようにしてください。

内村鑑三は「キリスト教を信じることによって自分の足元を深く掘ることができた」というような趣旨の言葉を残しています。私はクリスチャンではありませんが、学生の頃マタイの福音書の言葉「わたしの兄弟であるこれらの最も小さい者のひとりにしたのは、すなわち、わたしにしたのである」という言葉に感銘を受けた思い出があります。おそらく宗教を信じている人とは、見えないものが見えてくることではないかと思えます。関学のキリスト教主義もここに特質を見いだすことだと思います。

そして、最初の問題とも関連しますが、人間と社会をトータルに見た場合、現代は生命の誕生と死、病気の問題、生命倫理、環境問題、平和の問題と多くの課題が山積しています。こうした問題にも社会福祉の視点を持つことも大切だと思います。自分の関心領域から出発し、不断に多くのことを貪欲に学んでいってほしいと考えます。それが“価値観の変換”や“パラダイムの変換”につながるのかも知れません。“Comprehensiveness”

な勉強にも期待いたします。

**蛭江** 社会福祉を志す人に水を差すようなことを言いますが、現実的な社会福祉の仕事は、みなさんが描いておられるものと違って、厳しく、大変な仕事です。私達の仕事は生活を支えることであり、生活は雑事で成り立っています。しかしその雑事が、本人にとってはひとつひとつ大きな意味を持っています。その意味を見出すことが出来る感性を自分が持っているかどうかで、福祉に対する適性を考えてみることも必要だと思います。きつい、汚いといった“3K”という言葉がありましたが、福祉はまさにそんな仕事です。しかし、それでもなおその仕事が続けられるのは、そのことの意味が実感出来ているからではないでしょうか。そこに自らに適正があるかどうかを考える物差しがあるのでは、と考えています。

社会福祉を学べば学ぶほど、福祉がどういうものであるかということがわかればわかるほど、自分がそれに向いているかどうかを考えるのが、福祉を学ぶ4年間の意味だと思います。学んだから福祉の世界に入らなければならないというものはありません。福祉を学ぶことによって、自分の適性をしっかりと考える4年間を重ねていただき、よきワーカーとして現場に来ていただきたいと願っています。

**高田** 3人の先生に、それぞれの立場から『社会福祉におけるコンパッション(人への思いやり)』について語っていただきました。みなさんもそれぞれに印象深く受け止めながら、社会福祉における価値、倫理、人への思いやりについて、一人ひとりが思いをめぐらせていただいたのではないかと思います。

阿部先生の講演、そしてシンポジウムは、社会福祉学科開設の記念行事としてふさわしいものであったと感謝の気持ちでいっぱいです。社会福祉学科から“Compassion”を含めた3つの“C”をそなえたソーシャルワーカー、あるいは研究者が育つように努力してまいりたいと思います。先生方、会場のみなさま、本当にありがとうございました。